

# 秋さけ漁業調整対策事業調査 — 抄録 —

鈴木史紀 中川賢三  
\*小川弘毅 \*横谷要一 \*柞木田善治  
\*柴崎輝彦

## 発表誌名

平成3年度秋さけ漁業調整対策事業報告書（青森県） 平成3年3月

## 抄 録

### A. 日本海

- ① 青森県西津軽郡深浦町地先において、平成3年10月下旬から同年11月下旬の間に240尾の秋サケ親魚を標識放流したところ沿岸域で61尾、河川で31尾の計92尾が再捕され、再捕率は38.3%であった。
- ② 再捕された92尾のうち県内の再捕率は52.3%、秋田県で41.3%、山形県で6.5%であった。沿岸域と河川の再捕比は66:34で、このうち県内沿岸域の再捕率は52.1%、河川でのそれは47.9%であった。
- ③ 漁期後半での県内日本海側の河川そ上率は高くなる傾向がみられた。
- ④ 今期、県内日本海側に来遊した秋さけ資源は津軽海峡あるいは北海道日本海側を南下する群で構成されていたものと考えられる。

### B. 太平洋

- ① 青森県三沢市地先において、平成3年10月中旬から同年12月中旬の間699尾の秋サケを標識放流したところ沿岸域で207尾、河川で26尾の計233尾再捕され、再捕率は33.3%であった。
- ② 再捕された233尾のうち県内の再捕率は86.7%、岩手県12.9%、山形県0.4%であった。沿岸域と河川の再捕比は89:11で、このうち県内沿岸域の再捕率は88.1%、河川のそれは11.9%であった。
- ③ 今期、県内太平洋に来遊した秋サケ資源は、日本海系、太平洋系の起源の群で構成され、漁期半ば以降は太平洋系が主体で、特に県内の河川で多く再捕されていたことから県内に起源を有する群の割合が高かったものと考えられる。

以上の結果、青森県に来遊する群の構成は、県内産あるいは他県産を起源とする群で構成されているものと考えられるが、しかし、量的な構成比については

- 1) 沿岸並びに河川での再捕率について年変動が大きい。
- 2) 青森県に来遊する群の構成は、県内産あるいは他県産を起源とする群であると考えられるが、海域別の来遊構成割合が明らかでない。
- 3) 海況特に冷水の水塊配置（離接岸）によって来遊ルートが大きく左右される。
- 4) 同一地域での調査が継続実施されていないため、特定して比較することができない。
- 5) 稚魚の動向が検討されていない。

等から、青森県産秋サケと他県産秋サケの量的関係を推定することは難しいものと考えられ、今後より多くの資料を蓄積する必要がある。